論文

二つの言語のはざまで：英語と日本語をめぐる文化と翻訳

麻生　享志（早稲田大学）

1. はじめに

二十歳の時にアメリカに渡り、現在は英語で小説・エッセイ等を執筆し活躍する神戸生まれの女性作家キョウコ・モリ（Kyoko Mori）。母の自殺、父の再婚、義母との確執など自伝的要素を多く含むデビュー作『シズコズ・ドーター』（*Shizuko's Daughter*, 1993）がアメリカで出版された折、日本の出版社から翻訳の依頼を受けたモリはこの話を断る。後に二つの文化の間を生きる女性としての体験を綴った『悲しい嘘』(*Polite Lies*, 1997）で、母語とはいえ訓練を受けていない日本語では「書く」能力を持たないことを示唆したモリは、ネイティヴ・スピーカーならば言語を充分に操ることができるはずという一般的な了解をいとも簡単に覆す（K. Mori *Polite Lies* 18）。[1]自らの半生をエッセイ風に描いた『水の夢』（*The Dream of Water*, 1995）では、次のような日本語論も展開する。

> 私は感情や直感を考えにあらわすことが多く、手順を踏んだ論理的な思考ができないので、感情をはっきり表現することを嫌う日本語では、うまく気持ちをあらわすことができない。日本語では、論理的な部分だけを表現し、感情的な部分はあいまいに言外に含ませるだけだ。もし感情をあからさまに表現しようとすれば、失礼な、押しつけがましい、利己的な態度とみなされる。日本で育ち、毎日日本語を話していた頃ですら、感情や直感に訴えずには考えることができなかった私。表現したいと思う意見は、しっかりとした思考に則ったものではなかった。だから 13 年間も国を離れた後に、多くの考えが英語で、それに相当する日本語訳もなしに浮かび上がってくるのは当然のことだ。(K. Mori *Dream* 64)

かつて明治の改革者森有礼がアメリカに留学した際、英語教育の重要性を認識し、イェール大学で教鞭を執っていた言語学者 W. D. ホイットニー（W. D. Whitney）に日本における英語公用語論を提案したのは有名な話だが、その背景には近代化の時代に日本語という「脆弱で頼りない言語」を使用する限り、「知的好奇心旺盛な」日本人といえども進んだ「西洋の科学、芸術、宗教」から多くを学び取ることはできないという判断があった(Mori lvi)。それから 1 世紀あまりを経た今日、キョウコ・モリは日本語を捨て、英語に自らの思いを乗せ活躍することを選ぶ。日本語を文明開化の手段としては物足りないと判断し、その「使用をやめる」ことを訴えた森有礼の主張と（lvi)、日本語が感情表現に乏しい堅牢な言語であるというキョウコ・モリの主張には、大きな隔たりがある。しかし、この一見相異なる両者の主張も、日本語には何らかの欠陥があるという点では一致する。明治維新の政治家にとっても、多文化主義時代の小説家にとっても、一度日本の外に飛び出したときには英語こそが頼るべきコミュニケーションの手段であり、日本語は不十分な言語でしかなかったのである。

以下では、明治以来日本で先駆的言語として捉えられることの多かった英語の日本語文化における意味や位置づけを省みながら、日本語と英語という異なる二言語が引き起こす文化的折衝の問題を考察する。まずは近年日本で起きている「第二」の英語公用語論を取

り上げ、「日本が二一世紀、世界のなかでよりよく生きていくため」(船橋「英語」22) という救国の志に則った平成の「英語公用語」論に、日本語文化を脱中心化させる可能性があることを検証する。次にキョウコ・モリを例に、伝統的な日本語文化を支える価値観に背を向け、海外—とりわけ英語圏—へと移り住んでいく日本人女性たちもまた、日本語文化の脱中心化を助長していることと、そんな「国際的」な女性たちが見せる英語文化への両義的な態度を考察する。最後に、ナショナリスト的な動機に支えられた英語第二公用語論や、異文化にあこがれ日本を後にする女性たちがともに日本語文化を空洞化する可能性を持つなかで、これまでとは異なる日本語および日本語文化を発見していく手段として、「文化翻訳」の可能性を提言する。「国家」、「国民」、「国語」の境界線がずれ、多文化・多言語的な社会が形成されつつある今日、伝統的な日本語文化が持つ価値観に固執するのではなく—混成的な言語と文化を新たに創造するためにも—「言語翻訳」を一歩進めた「文化翻訳」という方法が有効な手段であることを示したい。

2. 英語公用語論とナショナリズム：脱中心化する日本語文化

2000 年 1 月、故小渕恵三首相の私的諮問機関「21 世紀日本の構想」懇談会は、「社会人になるまでに日本人全員が実用英語を使いこなせるようにするといった具体的な到達目標を設定する必要がある」という趣旨の報告書を作成、その長期的提言として「英語を第 2 公用語とする」という一節を付け加えた (時田)。これをきっかけに、英語「第二」公用語化の是非をめぐり、多くの議論が交わされることになる。いち早くこの問題を取り上げた『言語』誌 (2000 年 8 月)は、懇談会メンバーとして中心的な役割を果たした船橋洋一の論文「英語公用語論の思想—英語リテラシーは共存と信頼のテーマ」を中心に、「すすんで国民のすべてに、日常はかかわりのない英語を課するという発想は、最も国際的ではなく、偏狭な文化観と無教養を露呈したもの」とこれを厳しく批判する田中克彦の「公用語とは何か」(田中 46) 等の論文を掲載。また『英語青年』誌 (2000 年 9 月)は、英語教育の現場から賛否両論様々な意見を取り上げた「『英語公用語』論にひと言」という特集を組んだ。

そもそもこの「第二」の英語公用語論は、日本語と英語の二言語間にみられる情報格差をいかに克服するかという問題に起因する。『あえて英語公用語論』(2000) で、船橋は「コンピューター」という語を例にインターネット上でキーワード検索した場合、英語では 8,093,771 件の結果が、一方日本語では僅かに 41,668 件しか結果が得られないことを指摘し、英語のもつ言語の力が日本語にくらべ勝っていると主張する。[2]情報内容の質の差を考慮に入れない数字上の単純比較とはいえ、その差が歴然としていることは誰の目にも明らかであり、「ネットの向こうに広がる世界には、たくさんの興奮と冒険があり、未知との遭遇がある。それを手に入れるには英語をものにしなければならない」という船橋の主張には説得力がある (船橋『あえて』177)。事実、船橋の論は、経済言語学の視点からも裏打ち可能である。世界の言語を使用頻度に応じ「大言語」、「広域言語 (主要貿易圏の言語)」、「国家言語」、「地域言語」に分けるデイヴィッド・グラッドルによれば、日本語の地位は現在その経済力ゆえに「広域言語」に属するが、半世紀後の 2050 年には「国家言語」のレベルに落ちるという (グラッドル 161)。船橋が指摘するように、「『言語的孤立』」が原因で、日本人の間に「日本はあまりにも特殊だから無理だ、どっちみち

日本は理解してもらえない、何を言ってもダメだ、という無力感と疎外感」が生じる危険が確かにある（船橋『あえて』195）。

その一方で、船橋の英語第二公用語論は、時代的文脈が異なるとはいえ森有礼の英語公用語論に酷似する。船橋自身は、森の英語公用語論を「圧倒的な西欧列強の文明の力に気おされたあげくの劣等感のあらわれ」と切り捨ててはいるが、明治維新という変革の時代に国際通商力の強化を目的に「英語公用語論」を唱えた森と、21 世紀という IT 革命の時代に日本語の持つ情報収集能力の限界から「英語第二公用語」論を唱える船橋との距離は、そう遠くはない。[3]船橋は、森が日本語を「貧しい」言語と呼んだと強く批判し、「英語［第二］公用語論は、この種のコンプレックスからは自由である」と主張する（船橋『あえて』196-7）。しかし、船橋の議論にはコンプレックスはなくとも、このままでは日本が欧米、とりわけ米主導の世界秩序から遅れをとってしまうという救国の士のあせりが見え隠れする。『言語』誌に掲載された啓発的な論文「英語公用語論の思想」において、船橋は英語公用語論の必要性を次のように説く。

> なぜ、英語を公用語にするべきなのか。
>
> それは一言でいえば、日本が二一世紀、世界のなかでよりよく生きていくため、である。
>
> そこまでの覚悟を持たなければ、英語が世界語となろうとする時代、日本も日本人も世界で理解され、認められ、評価されることがますます難しくなるだろう。このままでは、日本はその志と真実を十分に理解されないまま、共感を得られないまま、歴史の舞台からずり落ちていく、そうした危険を感じるからである。（船橋「英語」22）

一方、かつて『日本の教育』（*Education in Japan*, 1873）の「序」において、森有礼は次のように訴えた。

> 現在世界を支配する英語を話す民族の商業的力は、我が国民に彼らの商いのしきたりや習慣を学ぶことを余儀なくさせている。英語という言語を修得する絶対的必要性が生じているのである。これは世界の国々の中で我が国の独立を維持するために、成さねばならないことである。（Mori lvi）

これまで森の英語公用語論は、日本語廃止論として批判の対象になってきた。当時留学中の馬場辰猪が森の日本語脆弱論を強く批判したのに加え、後の国語学者たちは森の論を「軽率な愚論として嘲笑」するか、あるいは「言語道断な暴論として攻撃」するかのいずれかの態度を取ってきた（イ 3）。しかし、森が単に英語をそのまま日本の公用語として採用しようと考えていたのかというと、そうではない。『「国語」という思想』（1996）においてイ・ヨンスクが指摘しているように（イ 6-8）、森はホイットニー宛書簡の中で、英語の「正書法には、語源もしくは発音にもとづく規則、法則、秩序が欠けていること、大量の不規則動詞があること」を指摘し、日本に導入するにあたっては英語を「簡略化［“simplified”］」すること、すなわち「すべての、もしくはほとんどの不規則的例外を取り除くこと」を提案している（森 309, 308）。『森有礼全集』の解説にあたったアイヴァン・ホール（Ivan Hall）はこの点を捉え、森は「日本語でなく英語を攻撃している」のであり、彼の主張は「国語廃止論」というよりも「英語廃止論」に近いとすら述べている（ホール 96）。森が英語と日本語のどちらを攻撃していたのかはともかくとして、当時森とのやりとりのなかで、ホイットニーは英語の正書法および発音法の不規則性を認め、これを

理想的には矯正すべきとしながらも、長い英語・英文学の伝統のなかで早急に変更できることではないと述べ、日本における英語の公用語化には長期的な展望が必要なこと、実践するにあたっては「英語国民によって話され理解されている形に則って、英語を新しい日本文化の標準言語として受け入れるべき」と釘を刺している（Whitney 152）。

このような英語矯正論をも含む森の英語公用語論を正確に理解するには、森の「日本語」観を知らなければならないと説くのは、前掲のイ・ヨンスクである。イは、森が―とりわけ書き言葉における―中国語文化の日本語文化に与えた影響を過大に評価するあまり、日本語を「単一の等質的な」言語と認められず、それゆえに「言語的分裂を越えるに足りるだけの『日本語』の一体性を思い描くことができなかった」と指摘する（イ 12）。確かに「序」における森の認識には、「日本」の公用語・国語としての地位をいまだ確立しきれていない「日本語」の姿が見てとれる。

> 日本語の書き言葉は、まるで中国語のごときである。これまで教育の場においては、必ずや中国語古典が使われてきた。［日本語には］4種類の書記法が存在するが、そのすべては中国語に由来する。これらの書記法は複雑さが異なり、中国語の文字を簡略化した度合いに応じて階層化されている。一般に使われている語数はとても少ないが、そのほとんどは中国語起源である。［中略］中国語の助けなくしては、我が言語は情報伝達を目的に教えることも使うこともままならない。つまり、貧しい言語なのである。（Mori lv–lvi）

「日本語」をこのように統一されていない不完全な言語として見る森の英語公用語論とは、黎明期にあった日本帝国の言語的統一を画策したあげくの主張であり、いまだ定まらぬ国家言語である「日本語」に、より効率的な言語ツールを与えようという比較的単純なナショナリズムのあらわれであったと考えられる。[4]

こうしてみると、船橋にみられる現在の英語第二公用語論と森の英語公用語論には、それほど大きな差が存在しないように思われる。すなわち、両者とも日本語という言語では得られない何かを英語という言語手段を通じ入手し、これを国家の繁栄に役立てようと促しているのである。興味深いのは、こうした国家主義的な主張が、近代国家制度の根幹ともいえる国民言語の衰退を招きかねないという点にある。森の日本語廃止論は、この点において極論ではあるが、船橋の主張も日本語の使用頻度の低下を招くという意味では、同じ方向性を向いていると言わざるを得ない。経済言語学の視点から日本語を分析する井上史雄は、英語を第二公用語としていない現在ですらすでにグローバル化に伴う英語等の日本語流入が原因で、俗に日本語の三位一体と呼ばれる「『言語』の使われる地理的範囲と、『国家』の範囲と、日本『民族』の住む範囲」の一致が崩れ、国内といえども「日本語だけではやっていけない状況」が生まれてきていると指摘する。さらに、第二公用語として英語等の言語を取り入れた場合には、「ハワイ日系人の英語まじりの日本語、ブラジル日系人のポルトガル語まじりの日本語」に見られる日本語のピジン化、あるいはクレオール化といった現象が起きるとも予測している（井上『日本語』78, 91, 109）。こうしたことから、井上は「単一の国家語・国語のほかに、もっと国際的に通じる言語を公用語として採用するのは、国民の統一意識のよりどころを減らすようなもの」と警告する（井上「公用語」37）。

ナショナリスト的な動機に支えられた英語第二公用語論には、このようにむしろ日本語

文化を脱中心化させていく可能性がある。[5]船橋は、英語を第二公用語とするもう一つの理由として、「日本のカタカナ言葉の氾濫とポップスに見られる幼稚な英語表現」が、「内向きの日本でだけ通用するジャーゴン（仲間内の隠語）の世界を生み出している」と指摘し、言葉が本来もつ意味と力を生かしたコミュニケーションを取り戻す必要性を訴えている（『あえて』180)。しかし、この船橋の主張は、外来語が日本語の中で異文化・異言語への緩衝機能の役割を果たしていることを無視ししているばかりか—皮肉にも—日本語文化に背を向けて執筆を続けるキョウコ・モリの冷たい視線をすら思い起こさせる。13 年ぶりの帰国体験から書かれた『水の夢』で、モリは遠い故郷日本を言語的にも疎遠な空間として描きだす。例えば、成田新東京国際空港で大阪行きの乗り継ぎ便を待つ場面において、日本では決して珍しくない外来語混じりの商品広告に、次のような反応を示す。

> 一番近いポスターは、ソーダ瓶のような写真に「ポカリ・スエット」と印字されている。日本ではこの手の英語ばかりがよく使われる。広告主は商品に外来語の名前をつけさえすれば、洗練された印象を与えられると思っているのだ。大抵の場合、そうした言葉はまったく意味を成さないのだけれど。少し離れたところに座っているカラシのように黄色いスーツを着た女性は、スーツケースの代わりに西武百貨店の手提げ袋に持ち物を入れている。シミひとつなく真っ白で、折り目一つない袋には、英語で SEIBU と風変わりなイタリック体で印字されている。目を背ける私。気が滅入ってくる。(K. Mori *Dream* 12)

日本における外来語文化の存在を無視し、日本語を外からしか見ようとしないモリの視線は、まさに脱国語化した日本人の視線であり、英語第二公用語化がもたらしうる結果のひとつを予見させはしないだろうか。

3. 脱「日本語文化」の女たち

「二人だから、あなたは話したくなる」いうコピーに、渡し舟を漕ぐ若い日本人女性とこちらに背を向け彼女と向き合う白人男性。ふたりは暗い岩窟のなかをゆっくりと進んでいく。言語習得を異文化の渡し舟と捉え、そのプロセスをロマンスとしてあらわす演出に惹かれる英語学習者も少なくないであろう。首都圏で展開するマンツーマン方式の英会話学校の広告ポスターである（左図)。一方で、一度言語を習得し渡米した日本人女性たちが彼の地にとどまり続けようと、非合法的な低賃金労働に甘んじるいわゆる「ビザ・スレイヴ」に身を落とす例が少なくないと報道されもする今日（平井 32-33)。いまだ門戸の狭い日本社会を飛び出す女性たちが直面する現実の断片である。それにもかかわらず、彼女たちが「日本」脱出を望むのはなぜなのか。

日本女性に見られる海外—とりわけ英語—文化への「あこがれ」を分析した『境界上の女たち』(*Women on the Verge*, 2001）で、カレン・ケルスキー（Karen Kelsky）は日本人女性にとって英

語をはじめとする外国語が、「仕事で必要な技能を越えた」何かであると指摘する。ケルスキーによれば、「敬語や男言葉、女言葉によって細かくコード化された」日本語という言語は、「女性の自由な自己表現を妨げる要因の一つ」として社会のなかで働いてきた。そうした状況の下、「[英語や他の外国語] は、女性が [日本文化とは] 別の価値をもつ制度に入っていくために欠くことのできない手段」として、すなわち「[日本的] ジェンダー」からの解放の手段として機能する (Kelsky 101)。事実、留学者数、外資系企業における就労者数、国際結婚者数という各統計における女性の占める割合は高い。例えば、高度成長期には男性の企業派遣が多くを占めていた留学者数は、1998 年の統計ではおよそ 7 割を女性が占める—しかもその多くが私費留学である (cf. Kelsky 102)。また婚姻統計では、特に英語圏の配偶者との婚姻件数で、女性が日本人の場合が男性が日本人の場合を圧倒的に上回る (cf. 『日本における人口動態』145-6)。ケルスキーはこうした現象の背後に、日本人女性の西洋文化への「あこがれ」だけでなく、男性中心的な日本社会への反逆の精神を読み取ろうとする。「[国際派の日本人女性にとって] 西洋は道標であり、基準であり、価値判断のよりどころである。彼女たちは西洋的習慣を修得することにより、自らのアイデンティティーを構築する」。そして、このようにして構築された国際派女性としてのアイデンティティーは、「トランスナショナルなエリート階級のオーラ」をまといつつ、日本社会の既存の—男性中心的な—価値体系を揺さぶることになる (Kelsky 123)。

脱日本語文化を促進するこのような「国際派」日本人女性の文化的ステレオタイプのイメージは、英語作家キョウコ・モリの姿に見てとれる。1957 年神戸で生まれたモリは、エリート・サラリーマン家庭に母と弟の 4 人家族で一見平穏に育つ。ところが、中学入学の迫った 12 歳の春に、母タカコが突然ガス自殺をする。その上、タカコの死後一年も経ずして、父ヒロシは以前からの愛人ミチコと再婚する。最愛の母の死への父の侮辱的な行為に怒り、絶望したキョウコは、高校時代にアメリカへ一年間留学。さらに大学二年の際に再度渡米すると、故郷を離れた彼の地で大学を卒業。大学院に進み、ウィスコンシン大学の創作科で博士号を修める。その後、ウィスコンシン州デペレのセント・ノーバート・カレッジで創作を教えるかたわら、小説家・詩人としても活躍。現在はハーバード大学で教鞭をとる。小説、エッセイ、詩と様々な文学ジャンルを横断的に創作するモリの作品には、日本での体験を元にしたストーリー展開が多く、その中心的な話題は、父ヒロシに代表される男性中心的な日本語文化への不信と嫌悪感である。例えばノン・フィクション作品『悲しい嘘』で、モリは性差別が日米文化に共通してみられる問題点であると指摘しつつも、日本で理想化される女性の控えめな態度が、男性中心社会の裏写しであると痛烈に批判する。[6]

> 理想的な日本人女性は、自己を表現するというよりもむしろ自己を抹消する。女性が評価されるのは、一生懸命に働きながらも何もしていないように振る舞うとき、そこに居ながらも、どこにもいないように振る舞うときである。日本人女性のつくり出す家庭は、純粋な何も存在しない空間である。その美しさは見事ではあるが、冷たくもある。叔母の家の飾り気のない台所は、叔母の好みや人柄をあらわしてはいなかった。壁には祖父が経営していたペンキ会社のカレンダーと、祖父の魂を守るために作られた小さな神棚のほかには何もなかった。祖父が死んで数ヶ月経っていたが、生きている叔母や従姉妹よりも死んだ祖父の存在のほうがよほど強く感じられた。ポプリ

や香付きロウソクといった私好みでない品々で飾られたグリーン・ベイの隣人や義理の家族のキッチンが、懐かしく思えてきた。みんなが自分の好みや人柄をあらわそうと家に飾っていたものを馬鹿にしなければよかった。叔母の家の空虚さにくらべれば何もかもがずっとましに思われた。(K. Mori *Polite Lies* 94)

一方、2000年発表の『ストーン・フィールド』(*stone field, true arrow*) では、アメリカで暮らすモリの体験と思われる内容が主題である。しかし、それは必ずしも日本語文化を後にした日本人女性の「開放感」を満喫させるものではない。むしろモリはこの作品で、異文化社会に生きるコスモポリタン女性の喜びと苦悩を相拮抗する形で表現している。また、コミュニケーションの媒体として英語を用いている事実に変わりはないが、主人公「石田真弓」を象形文字的に直訳したタイトル "stone field, true arrow" からは、英語という言語に日本語文化の意味をいかに映し出すことができるかというバイリンガル作家モリの新たな境地も見出せる。アメリカ文化のなかで社会的に成功したモリにも、異文化社会に置かれた自らの他者性を意識する瞬間が、確実に存在するのである。すでに『水の夢』に、ウィスコンシンに暮らしながらも周囲の風景に溶け込むことができない自分を描くモリがいる。

ここに住んで7年が経つ。仕事にも慣れて、今では教えながら書く余裕もでき、時間と力が足りなくて苦しむこともない。大学院や就職したての頃に感じた有無といわれぬ不安を感じることももはやない。それでも、家のソファーに座りながら、あるいは大学の研究室に居ながらにして、周囲の壁や家具が壊れていくような不安を感じる朝がある。ウィスコンシンの小さな町で定職にも就き、結婚して落ち着いた暮らしを送る自分がなんとも不自然に、あり得ない存在のように感じられるのだ。食堂に座る老婦人の容姿は、私の祖母とはまったく異なり、町はずれの農場で遊ぶ子どもたちは、私が産むかもしれない子どもとは似ても似つかない顔立ちをしている。私が今送っている生活は、本当は私のものではないのだ。町を車で走りながら、ついそんな思いに駆られる時がある。(K. Mori *Dream* 11)

こうした焦燥感は、二つの言語・文化を背負う人間にとってそう珍しいものではない。ケルスキーによれば、脱日本語文化的な「国際派」日本人女性といえども、「かつて信奉した西洋的価値を批判」し、自らが抱いた西洋社会への「あこがれを否定」すらし、「ゆっくりと、徐々に、注意深く」日本的な価値観、より正確に言えば日本的な価値観の枠組みに支えられた「コスモポリタニズム」に回帰していく場合も少なくないという (Kelsky 214, 215)。もちろん、祖国を言語的にも疎遠な空間と見なすモリには、日本語文化に回帰するという選択肢はなかろう。その一方で、二極を揺れる時計の振り子のように、「国粋派」と「国際派」の両極を結ぶ第三の方法が求められる時代に、今私たちは生きている。

4. 文化をつなぐ：文化翻訳の可能性

『あえて英語公用語論』で、船橋は日本を「バイリンガル」国民を中心とする「多言語国家」にすることを目標に「公用語法」制定の必要性を訴えているが、そこで興味深いのは「政府公式文書を日英両語とする」ことと、「医薬品と消費商品の品質ラベルをすべて日英両語とする」ことを提案している点である。既にカナダのように文化的にバイリンガル国家であることを余儀なくされている国で実施されているように、公文書と品質ラベル

の二カ国語表示化は、英語を第二公用語とするにあたっては必ずや実現しなければならないことであろう。また、バイリンガル教育の過程において、「英米以外の英語教師を積極的に招請する」ことを提案している点も興味深い。「カナダ、オーストラリア、インド、シンガポール、フィリピン、ナイジェリア、南アフリカなどからのネイティブも含む」教師陣から「『英語たち（Englishes)』」を学ぶという発想は、今日の多文化社会のあり方を理解した提案といえる（船橋『あえて』220-30)。

その一方で、「公用語法」ではバイリンガル時代の日本語教育のあり方について、アジアでの日本語普及を中心に、「世界での日本語学習態勢の強化と日本における留学生の日本語教育の強化を図る」としか述べられていない（船橋『あえて』229)。このことは、バイリンガル化による日本語、および日本語文化の変質を、船橋が深刻な問題になりうるとは想定していないことを示す。バイリンガル化は個人の言語観を変え、単一言語習得者とは異なる言語への働きかけを促す。第二次世界大戦後、ホロコースト生存者の両親のもとに生まれ、ポーランドからカナダに移住したいわゆるポスト・ホロコースト世代のユダヤ系英語作家エヴァ・ホフマン（Eva Hoffman）は、ロシアからドイツを経てイスラエルに亡命したある男性詩人が、ヘブライ語を修得するにあたりロシア語を「殺した」と彼女に語って聞かせたというエピソードとともに、自らの言語体験を次のように述べる。

> 私の場合、ポーランド語を殺すというほど暴力的なことはしなかった。しかし、どこか薄暗い地下室のような場所にポーランド語を押し込んでしまったことを覚えている。この心象風景をいかに表現するかにもよるが、［ポーランド語を］意識の向こうにしまい込んでしまったのである。(Hoffman “P.S.” 50)

母国語に代わる第二、第三の言語で自己を表現することが、いかに過酷な行為であるかを物語る一節である。

一方、現在日独両語で創作活動を続ける日本人バイリンガル作家多和田洋子は、初めてヨーロッパに渡った際、「もし別の言語が話せれば、別人になれるのかしら」と自問したという（Tawada 147)。後に多和田が「旅行鞄」のなかの「火急の問題」と振り返るこの点は、言語横断的に創作をする作家ならば誰もが関心を持つ新たなる「言語」によって表現・形成される新しい「自己」とすでに築き上げられた古い「自己」との関係を浮き彫りにする。もっとも、ホフマンがカナダ移住当初を振り返り、不慣れな英語で表現する自分が「現実世界というより思考や観念という抽象的な領域に存在する」ことに違和感を覚えたと回想しているように（Hoffman *Lost* 272)、一個の身体に修得言語の数だけ異なる人格が形成されるというのは、ジキル博士とハイド氏の存在のようにグロテスクな仮説であろう。事実、その後ドイツ語と日本語の双方で書くようになった多和田は、言語の使用状況によりいくつもの人格がスイッチのように自身の中で入れ替わるとは考えていない。

> もし言語を修得するたびに新たな人格を付け加えるということであれば、５カ国語を話す人は５つの人格を持つことになる。そんな人は５つの異なった屋台を出す農産展のような存在なのだろうか。私は１つも屋台をもっていない。むしろ蜘蛛の巣の編み目のような存在だ。新しい要素が加わると、その編み目がより一層複雑になる。そのようにして新しいパターンが次から次へと作られていく。多くの結び目ができ、きつい部分と緩い部分ができ、不完全な角や縁、穴、あるいは幾十にも折り重なった層ができていく。この編み目、小さなプランクトンを捕まえることができるこの編み目を、

多言語の編みと呼ぼう。(Tawada 148)

言語と言語の境を堅固なものと見なし、多重言語修得者を並行しつつも決して重なり合うことがない言語の帯をもつ多重人格と見なすのではなく、一つの人格のなかで幾重にも折り重なる多言語的人格と考える多和田の主張は、より現実的な認識といえよう。それは、公的な言語を機械的に二カ国語化しようという船橋の主張や、漢字で構成された名前を象形文字的に単純に英訳するモリの試みとは大きく異なる、言語横断的な提案といえる。多和田は、言語翻訳という作業を通じ思考回路を単に二重化させるのではなく、言葉の編み目を縫いながら二つの言語をつなぎ、文化を翻訳することを提案しているのである。例えば、日本語の「道」という言葉を取り上げ、多和田は「柔道」、「合気道」、「書道」、「華道」、「茶道」といった語を連想しながら、「道」には「個人の歩む道のり、歴史の存在」が含意されていると説く。

現代では、「柔道」はスポーツの世界に属し、「書道」は芸術に属す。もはやそこには何のつながりもない。しかし、話し手が意図せずとも、「道」という語がこれら二つの言葉を結びつける。

外国語として［母語］に接し、ある言葉を別の言語に訳そうとするとき、私たちは言葉の親族関係に気づく。言語のもつ歴史の足跡や隠れた特徴が、翻訳という鏡を通じて明らかになる。一方で、その特徴が明らかになればなるほど、言葉は抽象的になり、本来の意味からは遠ざかる。例えば、私はもはや「北海道」という言葉を、それが指示する島と自然な一体感をもつ語として発音できない。すぐにもその言葉を分解するか、あるいは別の言語に翻訳しようとしてしまう。(Tawada 150)

このような母語への「病的な」態度を、多和田は「フェティシズム」と戒める。確かにもはや言語に「意味的統一」を見いだせない状態は、言葉の「自然な流れ」を阻害する。しかし、言葉の「細部」をあたかも顕微鏡で拡大して読み取ろうという行為は、「これまで馴染んできたものの新たなる側面」を浮かび上がらせもする。この意味において、「フェティシズム」とは多和田にとって必ずしも否定的なことではない。「顕微鏡を通じて見る母がとても母とは認識できないように、細部を拡大して見る母語はとても母語とはわからない。しかし、芸術とは母をそれとわかる方法で描き出すことではない」。多和田の場合、こうした言語的啓示は母語の内部においてではなく、もう一つの言語との関係を通じて生じる。例えば、先に挙げた「道」という言葉が、日本語という馴染みの空間を離れ新たな意味を得たのは、ハンブルグで催された書道展でドイツの友人に「『書道』の意味は何ですか。柔道とは関係があるのですか」と尋ねられたときであったという（Tawada 150)。

もし多和田が示唆するように、翻訳とは二つの言語の間に置かれた人間の自己内省的な文化的営みであるのなら、バイリンガルとは単に二つの異なる言語を無関係に操る言葉の達人ではないはずだ。「文化翻訳」という概念の提唱者の一人メアリー・ルイーズ・プラット（Mary Louise Pratt）は、多言語的な人格を次のように定義する。

多言語的な人格とは休むことなくある言語から別の言語に、あるいはある文化概念を別の文化概念に、翻訳し続ける人間ではない—もちろん必要なときには翻訳をする能力もあるけれど。多言語的であるということは、なによりも複数の言語世界に生きることをいう—そうした人にとって、翻訳は不必要なのである。多言語主義の適切なイ

メージとは、多分翻訳ではない。むしろ二重化、人格の多角化である。(Pratt 35)

「多言語的な人格」が「人格の多角化」もしくは「二重化」を前提とするというプラットの主張は、一見多和田の主張とは相容れないように聞こえるかもしれない。しかし、ここでプラットは、「多言語的な人格」が「多重人格」であるといっているのではない。むしろ彼女の主張は、「多言語的な人格」がその内部に「多面性」を持つという点で多和田の主張と共通する部分が多い。事実プラットによれば、「翻訳とは、[言葉の] 意味の往来をあらわす奥深くはあるが不完全なメタファー」である (Pratt 35)。つまり、二言語間の意味の完全な置き換えを前提としないプラットは、翻訳を言葉の意味の無限に続く「往来」、すなわち読み直しと捉えている。「多言語的な人格」とは、まさにその翻訳行為の実践の場として、多角的な側面をもつ一個人として具現化する。こうした考えは、ホフマンがバイリンガル化した意識を「多様な価値を持つ意識」と見なしていることとも呼応する (Hoffman *Lost* 274)。自らの半生とバイリンガル化の体験を綴った『ロスト・イン・トランスレーション』(*Lost in Translation*, 1989) において、ホフマンはバイリンガル化によって生じる言語意識を、「それぞれの言語がもう一方の言語の形を変え、それと混じり合い、そしてそれを豊かにする。それぞれの言語が、もう一方の言語を相対化する」意識であると述べる (273)。バイリンガル化とは、「文化の内側だけではなく、その外側にも存在する」ことを体験した者のみが行き着くことのできる文化的贅沢、あるいは苦しみといえる (276)。

*　　*

明治維新間近の安政 6 年 (1859)、「開けたばかり」の横浜を訪れた福澤諭吉は、「店の看板も読めなければビンのはり紙もわからぬ。何を見ても私の知っている文字というものはない。英語だか仏語だかいっこうわからない」という異文化体験から、「英語を知らなければ、とても何にも通じることができない」という意識をもち、その翌年咸臨丸に乗ることを志願する (福澤 87-8)。それから 140 年以上を経た今日、英語第二公用語論や海外に移り住む日本人の増加はもとより、相も変わらぬ英会話人気、インターネットによる英語文化の普及など、私たちは英語の氾濫と脱日本語文化の大きな波の中にいる。この状況をかつての福澤のように「英語を知らなければ、とても何にも通じることができない」と考えるのも一案ではあるが、むしろ今こそ日本語文化を見直す絶好の機会と捉えることはできないだろうか。これまで内側、もしくは外側のどちらか一方からのみ捉えられてきた日本語文化を内外の視点を併せて捉え直すことこそ、多文化ならぬ多言語的価値観の広まる現在において必要なことではなかろうか。外から見る日本語文化の世界は、船橋が思うほど閉塞的な状況ではなかろうし、日本語文化を理解しようという意識があれば、モリが感ずるほど日本語は冷たく無感情な言語でもないだろう。二つの言語のはざまで思考することは、これまでにはない言語的なつながりや巡り会いをもたらしてくれるはずである。

> (柔道—合気道—華道—茶道—書道といった) 古い言葉のつながりが、歴史的思考を想起させる一方で、新しい言葉のつながりは、「現在」とより関連が深い連想を可能にする。そうした連想のなかで、本来は異文化や異領域に属する事柄が、思わぬ形で組み合わされることになる。(Tawada 151)

＊　本文中に引用した英語文献の日本語訳は、すべて拙訳である。

注）

[1] 『悲しい嘘』には、次のような一節もある。「みんなは、私がバイリンガルであることを幸運だという。しかし、私はそうは思わない。言語とはラジオみたいなものだ。英語か日本語かどちらかを選んで、周波数を合わせなければならない。両方を同時に聞くことはできないし、その中間では雑音しか聞こえない。[中略] 日本で日本語を話そうとしていても、英語で考えてしまう私。本当に言いたいことを捨てきれず、より適切な表現に集中してしまう。混乱して、慌てて日本語に訳そうとするが、私の感情は翻訳不可能であり、私の声は外国人の声だ」(K. Mori *Polite Lies* 17)。

[2] 船橋は、この結果について検索機「インフォシーク」を使用したとしているが、検索日を明示していない。2004 年 9 月 24 日の時点で「グーグル」を使用して「コンピューター」とキーワード検索し直してみたところ、英語では 224,000,000 件、日本語では 2,670,000 件という結果が出た。

[3] 松田は「何のための第二公用語か」で、次のように指摘する。「英語を第二公用語にと提案した人々は、英語を日本の国語にということとは本質的に違う、第二公用語なのだから、といわれるだろうが、行き着く先は同じように思われる。なぜなら、日本語は 21 世紀の世界にあっては表現力の乏しい、効率の悪い言語だという基本的な認識が共通しているからだ」(松田 367)。

[4] ホイットニー宛書簡を執筆した当初、森がどの程度本気で日本語を廃止すべきと考えていたかは定かでない。ホールは、森がホイットニーに向けて「純粋な音声記号上の規則によって話し言葉としての日本語を書き言葉に直す必要があること [中略] を唱えている」点を捉え、森の主張にすでに矛盾が生じていることを指摘している (ホール 94)。但し、ホールも述べているように、ホイットニー宛書簡の後に書かれた『日本の教育』の「序」では、「東洋における英語の勝利が必然的なことを素直に受け入れて [中略] それをできるだけ利用」すべきと考えた森は、日本語廃止論の立場を強くしている (95)。

[5] 興味深いのは、船橋をはじめとする英語第二公用語論擁護派の多くが、完全な言語の使い分けを前提とし、日本語文化の行く末にそれほど悲観的ではない点である。船橋は、「英語をものにすれば、日本語もものにできる、ということを言おうとしているのではない」と断りながらも、「自らの言語空間と意識空間を、違う言語と比べ合わせ、重ね合わせて、自らの言語 (つまりは自ら) をもう一つの視点で見る試み、そこから生まれる緊張感は、知的営為にとって欠かせないと私は思う」(船橋『あえて』207) と述べ、英語を第二公用語化することが日本語文化にいい意味での緊張感を与えると想定する。また、「21 世紀日本の構想」懇親会で座長を務めた臨床心理学者河合隼雄はインタビューに答え、「この程度のことでダメになる日本語、日本文化なら、早うそうなったらええんや」と語気を荒げる (天野)。英語第二公用語論とはどこまでも強気のナショナリズムに支えられているのである。

[6] 女性論的視点からモリ作品における「日本」及び「日本女性」の他者性に注目する大脇は、「『日本の女』に対するモリの心的位置は、彼女の不幸な少女時代を象徴するものとしての『日本』そのものへの嫌悪感・忌避感と、ある意味では彼女にとって『日本の女』の象徴であるともいえる母に対する両面価値的な感情との間で、常に揺れ動いているように思われる」と分析する (大脇 240)。

参照文献

Courtivron, Isabelle de, ed. *Lives in Translation: Bilingual Writers on Identity and Creativity.* New York: Palgrave Macmillan, 2003.

Education in Japan: A Series of Letters. (Addressed by Prominent Americans to Arinori Mori.) New York: D. Appleton and Company, 1873.

Hoffman, Eva. *Lost in Translation.* New York: Random-Vintage, 1998.

——. "P.S." Courtivron. 49–54.

Kelsky, Karen. *Women on the Verge: Japanese Women, Western Dreams.* Durham:

Duke UP, 2001.
Mori, Arinori. Introduction. *Education in Japan*. iii-lvii.
Mori, Kyoko. *The Dream of Water*. New York: Fawcett Columbine, 1995.
——. *Polite Lies: On Being A Woman Caught Between Cultures*. New York: Henry Holt, 1997.
——. *Shizuko's Daughter*. New York: Ballantine, 1993.
——. *Stone Field, True Arrow*. New York: Henry Holt-Picador, 2000.
Pratt, Mary Louise. "The Traffic in Meaning: Translation, Contagion, Infiltration." *Profession 2002*: 25-36.
Tawada, Yoko. "Writing in the Web of Words." Trans. Monika Totten. Courtivron. 147-55.
Whitney, W. D. "On the Adoption of the English Language in Japan." *Education in Japan*. 144-53

天野幸弘「国際社会で不可欠な『手段』河合隼雄氏（！英語公用語論）『朝日新聞オンライン記事データベース「聞蔵」』2003 年 12 月 18 日<http://dna.asahi.com:7070/cgibin/dna2srch.cgi?[D=0c00978957&CM=PH&RN=29...>.
イ　ヨンスク『「国語」という思想』（東京、岩波書店、1996）.
井上史雄「公用語の必要経費」『言語』第 347 号（2000 年 8 月）: 30-37.
——『日本語は生き残れるか』（東京、PHP 研究所、2001）.
大脇美智子「他者化される『日本の女』—キョウコ・モリとデヴィッド・ムラの日本の女の表象」海老根静江・竹村和子編『かくも多彩な女たちの軌跡—英語圏文学の再読』（東京、南雲堂、2004）237-55.
グラッドル、デイヴィッド『英語の未来』山岸勝栄訳（東京、研究社 1999 年）.
厚生労働省大臣官房統計情報部編『日本における人口動態—外国人を含む人口動態統計—人口動態統計特殊報告』（東京、厚生統計協会 2003 年）.
田中克彦「公用語とは何か」『言語』第 347 号（2000 年 8 月）: 40-46.
時田英之「『英語第 2 公用語』日本人になじむか」『読売年間 2002』2003 年 12 月 16 日<http://www.yomiuri.co.jp/nenkan/2002_01b.htm>.
平井美帆「ニュー・ヨークで"ビザの奴隷"になった日本人女性たち」『プレイボーイ』2002 年 11 月号 : 32-33.
福澤諭吉『福翁自伝』校注・解説富田正文（東京、慶応通信 1958）.
船橋洋一『あえて英語公用語論』（東京、文藝春秋 2000）.
——「英語公用語論の思想—英語リテラシーは共存と信頼のテーマ」『言語』第 347 号（2000 年 8 月）: 22-27.
ホール、アイヴァン「ホイットニー宛書簡　森の論述」『森有礼全集　第一巻—解説』（東京、宣文堂書店 1972）93-95.
松田徳一郎「何のための第二公用語か」『英語青年』第 146 巻第 6 号（2000）: 367.
森有礼「ホイットニー宛書簡」『森有礼全集　第一巻』（東京、宣文堂書店 1972）298-310.